



行事アラカルト

◆ 新入生ガイダンス&歓迎パーティー 4月8日 ◆



36名の新入留学生(学部、大学院)および新入外国人研究生7名を迎え、国際交流室においてガイダンスを行いました。その後、本部構内の「カンフォーラ」にて、歓迎パーティーを開催しました。桜は咲いていましたが、まだ少し肌寒い中、遠藤研究科長、縄田副研究科長、近藤国際交流委員長、本部国際交流センター長・副理事の森教授をはじめ多くの教員、職員、在学中の留学生など総数100名近くの方々にお集まりいただきました。新入留学生の自己紹介などを交え、楽しい交流会となりました。

◆ 前期日帰り見学会 6月3日 ◆



滋賀県信楽陶芸工房、農業水利施設(野洲川ダム、石部頭首工、ため池)、水田灌漑現場などを訪れました。参加者は39名でした。午前中は陶芸工房で陶芸家のお話を伺った後、登り窯などを見学しました。午後は地域環境科学専攻の教員ならびに滋賀県職員の方に、野洲川の上流から下流まで水利施設を詳しく解説していただきながら見学しました。留学生には、日本の農業用水の供給システムを理解する上で大いに参考になったことと思います。

◆ サッカー大会&ビアパーティー 6月26日 ◆



雨の中各国から116名、8チームの選手たちが集まり、ワールドカップさながらの熱戦が繰り広げられました。優勝は発酵チーム、2位はベトナムチーム、3位は内モンゴルチームと中国チームでした。泥だらけになりながらも、大きなけがもなく、国境を越えてみんなでサッカー大会で盛り上がったことは学生時代の良い思い出になることでしょう。大会審判や準備をお手伝いいただいた先生方、職員の方、運営を手伝ってくれた学生さん、サッカー部の皆さん、雨の中応援に駆けつけてくれた皆さん、大変有り難うございました。皆さんのおかげで素晴らしい大会となりました。

◆ 研修旅行 9月7日・8日 ◆



一泊二日で丹後方面へ出かけました。台風9号の影響も心配されましたが、大した影響もなく無事終了しました。1日目は天橋立や伊根舟屋の美しい風景を楽しみ、夜は「海と星の見える丘公園」のロッジで全員参加のBBQを通して、普段は知り合うことの少ない他国の留学生と親睦を深め、大いに盛り上がりました。2日目の午前中は京大舞鶴水産実験所を訪問し、益田准教授のレクチャーを受けた後、実験施設を見せていただきました。クラゲと魚の研究などとても興味深いものでした。午後は関西電力「エル・パーク・おおい」を訪問しました。説明の後、実際の発電所を見学させていただき、その威容に圧倒されるとともに、多くの方の努力により初めて電力の安定供給が実現していることを知り、大変勉強になりました。ご協力いただいた皆様、大変有り難うございました。留学生の皆さんも口々に、楽しくて有意義な研修旅行だったと喜んでいました。

◆ 2010年度の後期行事予定 ◆

■ 後期新入生ガイダンス

日時:10月5日(火) 16:00-17:00
場所:国際交流室(農学部総合館S-131室)

■ 第4回 ほっこりカフェ

演者:Mr. Javier E. M. Moscoso (生物資源経済学専攻M1)
日時:11月10日(水) 15:30-17:00
場所:森林科学専攻会議室(農学部総合館S-130室)
演題:A short description of Bolivia and its people (ボリビアの国と人々)

■ 後期日帰り見学会

日時:12月10日(金) 8:30-18:30
場所:和歌山県有田郡
内容:有田ミカン選果場の見学

■ 第4回餅つき大会(予定)

日時:1月中旬-下旬
場所:農学部2号館東側

発行 京都市左京区北白川追分町 京都大学 農学研究科・農学部国際交流室
印刷 京都府京都市南区東九条南石田町1番地 朝陽堂印刷株式会社
電話 (075) 753-6320,6298 e-mail: fsao@kais.kyoto-u.ac.jp
*本News Letterのバックナンバーをホームページに掲載しています。http://www.fsao.kais.kyoto-u.ac.jp/

News Letter

International Exchange Section in Agriculture http://www.fsao.kais.kyoto-u.ac.jp/

留学の機会

二井一禎
[農学研究科教授]
[地域環境科学専攻]

私は39歳になって、ようやく留学の機会を得た。昨今の傾向からすれば、ずいぶん遅い機会であった。家族連れでの1年間のカナダでの生活はこれまでの私の人生で最もゆとりある、みのり豊かな時間であった事は間違いない。それまでも留学の機会が無かったわけではない。学位を取り、その学位論文を御送りしたオーストラリアの著名な線虫学者から、留学のお誘いを受けたことがある。当時まだ職にも就いていなかったため、生活が安定せず、帰国後にアルバイトの口を失うことを恐れて、折角の好機を逃してしまった。多くの線虫研究者から「またとない貴重な機会をどうして利用しなかったのか」と惜まれた。何もその事が分かっていなかったわけではない。アルバイトの事、病身の母の病院送迎のこと、など躊躇せざるを得ない理由があった。最近の若者について、留学志向が減っていると批判が出ているが、現況の不景気で就職が極端に難しくなり、かろうじて就いている時限付きのポストクの職などに在る者にとっては、なかなか留学に踏み切れないのは仕方ないと同情する。若者にばかり批判を浴びせる大人達は彼らの置かれている状況にも少し理解を寄せる必要がある。

さて、私の話。次の機会は合衆国のミズリー大学への留学のお誘いで、これは森林総合研究所の研究者が用意してくださった。マツ枯れの研究者を一人共同研究者にというお話であったが、土壇場で先方の条件が変わったためにキャンセルされた。そして、三度目の正直がカナダの森林研究所への留学の話である。ようやく巡って来たという思いや、遅すぎる留学であるという自覚から、1年の留学をできるだけ充実したものにしてしようと考えた。広いオフィスを一室与えられ、コンピューターと顕微鏡が備えられていたので、その気になれば一日中この部屋に籠って勉強三昧も可能であった。しかし、実験や研究のほうは、教わる事よりもむしろ教える事が必要な立場であったから、マイペースで仕事を進められる。それならば、オフィスを出て、できるだけ多くの人たちと交流しようと努力した。下手な英語に尻込みしがちな自分に鞭をうち、研究所の多くの人といろいろな機会に様々な交流を試みた。20年以上もの歳月が経ち、多くの知人がリタイアしたが、今も何人かの人たちと交流がある。

帰国後、この留学で得た経験を活かさねばと考えた。一つは自ら国際学会への参加を積極的に試みる事。ポスターセッションではなく、必ずオーラルセッションにチャレンジする事。できれば、座長を務めたり、オーガナイザーを務める事。英語は下手でも、多くの人と知り合いになれるのがその理由。他の一つはできるだけ多くの外国研究者を招いて学生諸君に、「ガイジン」と「エイゴ」という国際化への垣根を取り除く事。そのためもあって様々な国から外国人研究者

を研究室に招いた。長い人で2年間。短くとも3ヶ月。ほんの一時的に立ち寄った人まで含めると結構な数になる。留学生も遅ればせながら何人かお世話している。彼らの苦勞をできるだけ理解し、日本での生活を充実したものにしてあげたいと思う。さらに、大学人として留学生のための奨学金受給候補者を選抜するための面接委員としても多くの留学生諸君と接してきた。留学にあこがれ、その機会を最大限に活かそうという聡明で意欲溢れた若者が多い。どの若者にも等しく機会が与えられれば良いのと思う。それもこれも、自分が留学中にお世話になったカナダの友人達の親切への国際的な返礼であると考えている。

ところで、留学をする事の意義は何なのだろうか。留学をして金を稼げた時代があったとか。もちろん、それを目的に留学する人があるとは信じたくない。次は留学中に仕事に精出し、業績を稼いだ人。普通研究者の間ではこのような若者が讃えられる。しかし、もしそのような若者が、留学先で人と交流せず、その国の文化や芸術に触れる機会も無いまま仕事に熱中していたとしたら、やはり何故留学の道を選んだのかと問わざるを得ない。もし、留学に意義を見出すとするなら、もちろんその事によって研究や実験が飛躍的に向上する事が望ましいのだが、むしろ多くの人と交流の機会を持つことにこそ意義をみつけたい。そして、その事を通して、自分が興味を持ち、日夜取り組んでいるテーマについて、遠く離れた外国で、言葉も、肌の色も異なる多くの人たちが共通の興味を持ち、真剣に取り組んでいる姿に接する事にこそ真の意義があるのではないかと。研究はともすれば孤独な作業の繰り返しであるが、世界中で多くの人たちが同じ問題に取り組んでいることを思えばこんな楽しい事はない。留学の機会はその「ガイコク」の研究者が実は自分と変わらぬ悩みを抱える普通の人であることを知る機会でもあるのだ。



来訪外国研究者もまじえたゼミの後で二井研究室(筆者:前列右から2人目)



“育種学研究室との20年余り前から”

徐 正進(Xu Zhengjin)
Guest Professor

(瀋陽農業大学 中華人民共和国)

1988年の秋、私は瀋陽農業大学の修士課程を卒業し、同大学水稲研究所の助手として就職した後、恩師である故楊守仁教授から故山縣弘忠教授に推薦していただき、京都大学大学院農学研究科育種学研究室で1年間の研修生活を始めました。谷坂隆俊先生(当時助教授)の直接指導の下、主に水稲超多収育種の遺伝と生理の基礎を学びました。その間に谷坂先生の厳格且つ真面目な指導と、育種学研究室の奥本裕博士、中崎鉄也博士(当時助手)などの親切な手助けをうけながら、日本で新しく育成された水稲超多収品種を用いて圃場試験を行い、超多収品種の株型、光合成と物質生産の特徴、育成系譜及び生産潜力などを解析しました。これらの結果は、瀋陽農業大学水稲研究所における関連研究の科学的な根拠となり、その後の中国特に東北地方における水稲超多収育種の飛躍的な発展を推し進めました。水稲の遺伝育種研究にとって、1年間は本当に短かすぎます。谷坂先生は、私に育種研究室で博士課程に進学したいかどうか尋ねられました。もちろん良好な環境で引き続き学びたかったですし、谷坂先生や育種研究室の同僚をも惜しんでいました。しかし残念ながら、色々な事情があり、1989年9月に瀋陽農業大学に帰りました。本当に忘れられない1年でした。今思い返しても、もしその時そのまま残って、引き続き学ぶことができていたなら、少なくとも研究水準を今より一段と高めることができたと思います。私は、幸運にも谷坂先生と出会い、幸運にも育種研究室で学ぶことが出来ました。その期間が1年しかなかったことは少し残念です。



1989年の記念ラベル

水稲は中国の最も重要な穀物であり、穀物総面積の30%を、食糧総生産量の40%を占め、60%以上の人口がイネを主食にしています。そのため、多収はかねてから中国水稲の育種と栽培における最も重要な目標です。私は、帰国した後も常に育種研究室と交流しながら、引き続き水稲超多収育種の遺伝と生理の基礎研究に従事して来ました。1990年代以降、一連の研究から、水稲の直立穂型は、個体群構造と受光態勢を最適化することで群落へのガス交換を促進すること、耐倒伏性を高めるこ

と、及び登熟期の個群体成長率を高めることによって生産潜力を著しく高めることが明らかとなりました。したがって、直立穂型は、半矮性品種と理想草型品種に続く水稲草型の新たな画期的な遺伝改良であることが分かりました。しかし、様々な条件に制限され、直立穂型の分子生物学に関する研究は緩慢でした。2006年から育種学研究室に大学院生を派遣して共同研究を始めました。2009年、について新しい優性直立穂型遺伝子を同定して、遺伝子の分子遺伝構造が明らかになりました。直立穂型遺伝子を一層研究し、利用するための分子の遺伝学の基礎を打ち立てることができたのです。10数年にかけて解読できなかった直立穂型の分子構造は、共同研究によって僅か数年で明らかになりました。もし少し早く谷坂先生の指導をうけて、育種学研究室との共同研究を始めていれば、解読に要した年数はずっと繰り上げることができたかもしれません。谷坂先生と育種学研究室との協力は幸運でしたが、もう少し早くから共同研究に取り組めなかったことが少し残念に思います。

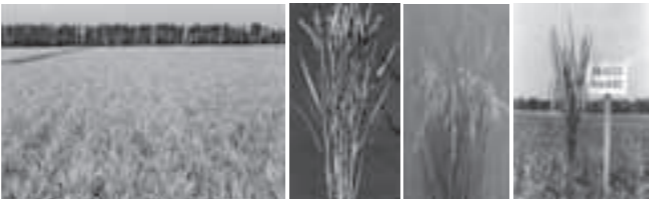
科学研究も人生もいずれも幸運は訪れて来ますが、残念な思いが幾つかあることも避けられません。私は、今後、多くの幸運も望みますが、残念な思いを少なくしたいと思います。

時間の過ぎるのは本当に速いです。あっという間に谷坂先生と20年余り付き合いました。2009年10月、谷坂先生と育種研究室のお蔭で、幸い京都大学農学研究科の外国人客員教授になって、もう一度一緒に共同研究ができました。

何日か前谷坂先生の定年退職記念活動に参加しました。良師であり、よい友人でもある谷坂隆俊教授の定年退職に際し、心から先生の健康と幸福をお祈りします!京都大学大学院農学研究科育種学研究室の今後一層の繁栄と発展をお祈りします!

末筆に半年来谷坂隆俊教授をはじめとする育種学研究室の多くの方々から仕事に多大なるご協力をいただき、農学研究科国際交流室・農学専攻事務室・京都大学国際交流会館黄檗分館の皆様から手続きや日常生活のお世話いただきました。国へ帰る前に、この場をお借りして皆様に深く感謝します。

2010年3月



直立穂品種の収穫直前の様子 直立穂品種 普通品種 ハイブリッド品種



“Fruitfulness of my life at Kyoto University”

Zeng-Yei Hseu (許正一)
Guest Professor

(National Pingtung University of Science and Technology, Taiwan)

In my images since child time, my grandparents and parents always liked special calendars hung on the wall for listing their work schedule. There were many beautiful photo pictures in association with these calendar pages, including shrines, Buddhist temples, scenes of garden, and ladies wearing kimono, and so on. My father told me: these are symbols of Japan. My family is mutual style of Buddhism and Taoism in religion and similar to Japanese. When I was grown up and went to school in National Taiwan University (NTU) from undergraduate to PhD program in Taiwan, the first sentence in the introduction of history of NTU always told me: NTU was initialized by Japan, which was one of nine imperial universities of Japan before the Second World War. Japanese styles in teaching and research gave positive and clear impacts on NTU including my learning institute (Department of Agricultural Chemistry). In fact, my home university: National Pingtung University of Science and Technology (NPUST), Taiwan, was also founded under the name of “Kaohsiung State Pingtung Extension School of Agriculture” by Japan in 1924. Therefore, the indicators of Japanese spirit are fine culture and working hard with high passion and concentration to me. Another reason in easily obtaining information from Japan is few differences in most character meanings between Japanese and mandarin.

I am a soil scientist in the studies of pedology and heavy metal contamination. I have known many Japanese scientists through some interactions during science conference or workshop for around 10 years. In my scientific career this is not only the first time for sabbatical research, but also being as a guest professor in abroad. “Why did you choose Kyoto University (KU) for your visiting research?” There were many friends in making this question to me, when I came to KU. My child images and family culture, academic learning background, and much friendship to Japan may have the best answer for above question.

Since approximate 5 yrs ago, I have started in the studies of serpentine soils related to the issues in mineral transformation and heavy metal dynamics at my home university. Based on literature report, we know Japan and Taiwan are in the convergent belt between Euro-Asian tectonic plate and Pacific one. It is easy to find serpentine landscapes in these regions. Later, I knew Assistant Professor T. Watanabe during 8th Eastern and Southeastern Asia Federation of Soil Science Societies (ESAFS 8) held in Japan in 2007. He is an active and young soil mineralogist from Soil Science Lab, Division of Environmental Science and Technology, Graduate School of Agriculture, KU. Last year, I asked Dr. Watanabe for the possibility of my visiting research at KU. Therefore, I realized my dream of Japanese symbols and science in this year. Taiwan and Japan, located in the West Pacific Ocean, are humid in climate. Serpentine landscapes are intensively found in these regions, adjacent to the convergent boundary of Eurasia Plate and Pacific Plate. In addition, the dominant

use of agricultural land in Taiwan and Japan is paddy rice production and forest. Due to the increased use of serpentine soils in agricultural production, the objectives of our joint research are: (1) to understand the variation of total and extractable Ca/Mg ratios in the serpentine soils from paddy field and forest in Taiwan and Japan, (2) to compare the contents of Cr and Ni with the different agricultural land uses in the West Pacific regions, and (3) to indicate the relationship between Ca/Mg ratio and availability of Cr and Ni in these soils associated with mineral transformation.

In my staying period from February to April of 2010, I enjoyed very much in soil science activities including conference in Tokyo and Kumamoto, field excursion in Kyushu and Chiba for visiting soil profiles, seminar presentation in National Institute for Agro-Environmental Sciences, Meiji University and KU, and discussion with all members of Soil Science Lab at KU. With respect to a soil teacher and researcher like me, Andisol (volcanic soil) is a major type of soils in the world. However, Japan is well known as a great kingdom of Andisol. The diverse Andisols with different age, source, parent material, landscape, and land use gave me advanced knowledge in teaching and research of soil science in the future. I have fruitful harvest from these enjoyments. In addition to these, I have visited many shrines, temples, and other heritage sites in Nara and Kyoto. I am from a tropical country, but experienced snow in February, plum blossoming in March, and cherry blossoming in April when I looked around KU. During the period of cherry blossoming, I took a camera myself every day because I could not miss any beautiful blossom. According to my rough calculation, the total species of cherry from my photo picture collections is over 10 species. Surprisingly to me, the Kyoto Visitor’s Guide indicated the total number in Japan should be more than 20 species. The KU Museum has also attracted me to visit it, which contains numerous collections in archeology, botany, geology, and zoology with a large investment in maintaining operation.

A comfortable office was prepared for my stay at KU, and I have done much paper work there such as several submissions in journal and conference under the joint studies with my host professors (Drs. S. Funakawa and T. Watanabe). The staff members of International Exchange Section in Agriculture of KU helped me very much in administration business and housing particularly the help from K. Watanabe and K. Morita for my stay. Dr. T. Watanabe concerned me very much, too. He always arranged well in my families short term visit here and said to me: if any problem, please look for me anytime and anywhere. I am thankful to all members of the Soil Science Lab, particularly for my appreciation to the very kind assistance from Dr. K. Fujii, Fujii-san, a post Dr. Fellow, took care of me well in twice scientific trips within Japan, due to the complicated transport system in train. However, I taught him Chinese sometimes and sometimes he taught me Japanese. Moreover, I felt that Japanese graduated students pay highly attention and passion to their studies. These harvests and friendship have promoted the strength of collaboration between NPUST and KU.

My stay at KU is only three months and going to end soon. Anyway, I have recalled having all nice images of Japan from my child time. I still have much scientific business or work loadings to do at my home university after this sabbatical research. This science recharge of my stay at KU has clearly contributed to my promotional studies in the future. It is an unforgettable memory to me in all exciting things at KU.

外国人客員教授 平成22年10月～平成23年3月、外国人客員教授として下記の5名の先生を招聘しています。

氏名: Professor Roderick Alastair DREW
国籍: オーストラリア
招聘期間: 平成22年10月1日～平成22年12月31日
所属・職: グリフィス大学分子生物学・物理学研究科教授
研究題目: 組織細胞培養技術を利用した果樹のバイオテクノロジー
受入教員: 農学専攻・果樹園芸学分野 米森 敬三教授

研究題目: 養菌性クイムシ *Platyptus quercivorus* に関連する菌類の生態学的研究
受入教員: 地域環境科学専攻・微生物環境制御学分野 二井 一禎教授

氏名: Professor Malcolm FITZ-EARLE
国籍: カナダ
招聘期間: 平成22年10月1日～平成23年3月31日
所属・職: キヤピラノ大学名誉教授
研究題目: 英語による科学論文の作成技術に関する研究
受入教員: 比較農業論講座 平井 伸博教授

氏名: Associate Professor Craig Edward WHELOCK
国籍: アメリカ合衆国
招聘期間: 平成22年10月4日～平成23年1月7日
所属・職: カロリンスカ研究所准教授
研究題目: 化学構造に基づく脂質性メディエーター代謝阻害剤の探索
受入教員: 応用生命科学専攻・生物調節化学分野 宮川 恒教授

氏名: Professor Halvor SOLHEIM
国籍: ノルウェー
招聘期間: 平成22年10月1日～平成23年1月31日
所属・職: ノルウェー森林・景観研究所上級研究員/ノルウェー大学教授

氏名: Professor Yun-Hwa Peggy HSIEH
国籍: アメリカ合衆国
招聘期間: 平成23年1月7日～平成23年7月31日
所属・職: フロリダ州立大学食品栄養学科教授
研究題目: 食品の安全性と品質評価における抗体の利用に関する研究
受入教員: 食品生物科学専攻・食環境学分野 北島 直文教授

客員教授による特別講演会

2010年4月21日(水) 13:00-15:00
2010年4月28日(水) 13:00-14:00

Professor Zeng-Yei HSEU (許 正一)
(National Pingtung University of Science and Technology)
“Soil Distribution and Pedogenic Characterization in Taiwan”
“Soil formation processes on serpentines and their agro-environmental implications”

2010年5月14日(金) 14:00-17:00
Professor Nathalie GONTARD
(The University of Montpellier)
“Structure/transfer/reaction relationships in food/packaging systems: integrated approach for active, biodegradable and edible materials design with benefit and risks considerations”

Professor Stephane GUILBERT
(Biopolymer Science and Process Engineering Montpellier SupAgro)
“Bioplastics: Taylor-made protein based functional materials”

2010年5月27日(木) 15:00-16:30
Professor John Kenneth SCHUELLER
(University of Florida)
“Robotic and Precision Agriculture Research for Florida Specialty Crops”

2010年7月27日(火) 11:00-12:00
Professor Panichsakpatana SUPAMARD
(Kasetsart University)
“Better Bridging Japan and Thailand for Education in the Future”

農学部国際交流ニュース

農学部国際交流推進後援会の会員加入について

平成22年度会員加入のお願いを7月にご案内しましたところ、9月14日現在で、学内外から121名の方にご加入いただいております。誠に有り難うございます。引き続き加入を受け付けておりますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

外国人留学生の大学院入試合格者

平成23年度大学院修士課程入試(8月17日～19日実施)合格:応用生命科学専攻(韓国1名)

10月大学院入学留学生

農学特別コース(G30)留学生(計16名)
修士課程5名:内訳 農学専攻(ネパール1名)、応用生命科学専攻(中国1名)、地域環境科学専攻(中国2名、バングラデシュ1名)
博士後期課程11名:内訳 森林科学専攻(中国1名、インドネシア1名)、応用生命科学専攻(台湾1名)、応用生物科学専攻(タイ1名、中国2名、インド1名)、地域環境科学専攻(中国2名、インドネシア1名)、食品生物科学専攻(タイ1名)

研究生(計15名)
内訳 農学専攻(タイ1名、バングラデシュ1名)、森林科学専攻(ミャンマー1名)、応用生命科学専攻(ネパール1名、中国1名)、応用生物科学専攻(中国1名、ブラジル1名)、地域環境科学専攻(中国1名、ミャンマー1名)、生物資源経済学専攻(中国1名、タイ1名)、食品生物科学専攻(エチオピア1名、マレーシア1名、中国2名)

10月学部入学短期留学生

KUINEP留学生 森林科学科(オランダ1名)